

夢の中まで会いに来て

夢を見る。ユメの嫌な記憶と大切な記憶とがぐちゃぐちゃになった、趣味の悪い夢。どうせ見るなら、その時だけでも幸せになれる夢が良い。あのひととの日々をそのまま映した夢が見たい。……ねえ王子さま。どうかユメを、救い出して。

「あ……」

ぼやけた天井は真つ暗できつと朝にはほど遠い。臉をぎゅつと瞑つたら目尻からベッドのシーツへ涙が伝う。ぼやけた世界からくつきりとしたクリアな世界に変わつても、当たり前前に辺りはあまり見えなかった。

「……どうせなら、ユメも——」

一緒に連れて行つて。あのひとを思い浮かべながら口に出そうとしたその言葉はすんでのところで呑み込む。今はまだ、エスのそばにいてあげなきゃ。エスはまだまだアイドルとしても王子さまとしても未熟で、目が離せないから。

想いを閉じ込めるようにまぶたを閉じる。きらきら輝くお空の星を思い浮かべながら。夢の中でも、きつと見られますように。願っているうちに意識が遠のいていく。

『泣かないで』

「王子さま……？」

上から降ってきた懐かしいその声にゆつくりと顔を上げた。雪が降る、星の綺麗な夜だった。

「おい。どうしたんだよ、泣いてんのか？」

「あれ？ エス……？」

「アハハ。ひどい顔だな！」

泣いてないし、ひどい顔だなんてひどい！ そう言い返そうとした時、自分の意思とは関係なく目頭が熱くなつて、ユメの頬に涙がつつた。顎先でたまつた涙はやがて後から流れてくる涙と一緒に地面に落ちる。

「ユメ、泣いてる……」

「泣いてるよ、さつきからずっと。おまえまさか気

づかなかったのか？」

ずっと？ 悲しくなるような出来事には心当たりがない。疑問に思いながらも、アハハと笑うエスにユメはぷくつと頬を膨らませた。

「そんなに笑わないで」

エスは本当にこういうところがある。今だって、かわいいユメがこんなにも涙を流しているのにまたかつて呆れたような顔をしてる。けれど悔しいことにそれに救われたことも一度ではなくて。例えばそう、ちょうど今みたいに雪が降っていたあの日……。

そこまで考えたところで、これがそのあの日をほとんどそのままなぞっていることに気がついた。まるでそうするのが当然のようにユメの顔を覗き込んできたエスが、堪えきれないように吹き出して、でも優しく家に招いてくれて。これはそんな、忘れられないあの日の再演のようだった。

……ああ、きつと、夢の続きなのね。たしかに夜空には無数の星がきらめいている。ちゃんとユメが願ったままだ。